

(二) クリームパン

永代美知代

「母様、私ね、この次ぎの火曜日くわんやびが遠足えんそくよ、ね、ね、それで以て今年ことしはね、もう動物園どうぶつえんぢやないの、中野なかのよ、中野のお祖師様おそしさまよ、だつてもう三年ねんですもの、一年坊主ねんぼうずと一緒にしよなんぞされて堪たまるもんですか。」
「去年きょねんも一昨年ひととせも、二年ねんつ續けて上野うえのの動物園どうぶつえんにはかり行ゆかされてゐた幸子さちこさんの悦よろこびと云いつたらありません。それからもう毎日まいにちのやうに、持もつて行くお辨當べんたうや、お菓子くわしや、水菓子みづくわしや、そんな事ことで氣きばかり揉もんで居ゐりました。」

「母様、私わたしサンドイッチにしませうかしら。」

「え、いでせうよ。」

「チースと玉子たまごをどつさりはさんでね。」

「何でもあなたのいゝやうにしませうね。」

「でも、おすしがいゝか知しれないわね。」

「さうね、丁度春先きの事だしするから、筍だの落だの入れて、皆様五目壽司をお持ちになる方が多いかも知れないね。」

母様がさう仰有ると幸子さんは又、急に別なものがいいかも知れないやうな氣になりました。

「でも私、五目はあきたわ、いつそ海苔巻がいいわ。」

「さう、ちやのりまきと定めますか。」

「だけども、だけども——」

秋山さんは何になさるだらう？ 染子さんは——

斯う思ふと、何にしていゝのか、幸子さんは思ひまどはずには居られません。

「さあ、もういゝ〜明日ね、幸子さんお辨當は何にするの？」

遠足の前日、幸子さんが學校から歸ると、母様はお訊きになりました。

「五目は嫌として、海苔巻？ サンドイッチ？」

「いまだに定め兼ねた幸子さんはもう絶対絶命、母様、私解らないわ、いつそのこと母様きめて頂ね。」

「アラ、アラ今晚買つて頂戴よ、ね、明日遠足に持つてくんだから、よう母様、ようてば。」

「そんな事云つて、何處に賣つてるんだか解りもしないぢやないの。」

「いゝえ、本郷の大學前のパン屋にありませう。」

「本郷の大學前！ まあ随分遠いぢやありませんか。それに明日の朝は早いんだから、またいつかね。」

「アラ、アラ今晚買つて頂戴よ、ね、明日遠足に持つてくんだから、よう母様、ようてば。」

「そんな事云つて、何處に賣つてるんだか解りもしないぢやないの。」

「いゝえ、本郷の大學前のパン屋にありませう。」

「本郷の大學前！ まあ随分遠いぢやありませんか。それに明日の朝は早いんだから、またいつかね。」



戴な。」

「さう、ちやそれはそれとして、お菓子は？」

「ビスケットと、キャラメルと、お蜜柑と、おりんごと——」

「それから此處にゼリビンスがあります、ボン〜ズがあります、ね、もうそれで澤山、いゝでせう、今の内早くおかばんへしまつてお置きなさい。」

「え、有り難う。」

まあ何と云ふとつさりませう、こんなに澤山持つてく方はそんななにはしなに定つてる。——嬉しい、うれしい。——幸子さんは大喜びで、夕方遅くまで外で遊んで來ましたが、御飯のあとで、ふと

初子さんがクリームパンをお持ちになる話を思ひ出し、母様におねだりしました。

「ね母様、私にも初子さんのやうなクリームパンをもたせて頂戴な、それはおいしいんですつて、アンパンのやうであつて、中にクリームが入つてるのよ。」

ね母様、買つて頂戴な。」

から、早く寝ないと起きられませんかよ。」

「大丈夫起きますから、ねえ母様、電車に乗つてけば、大學前位譯ないぢやありませんか。」

それで幸子さんはとうとうたけやを掛けて行きました。

でも夜分のせいか、生憎クリームパンが賣切れになつてゐ

て、幸子さんが落膽してお家へ歸つて來たのは、もう彼は十一時前でした。

から、早く寝ないと起きられませんかよ。」

「大丈夫起きますから、ねえ母様、電車に乗つてけば、大學前位譯ないぢやありませんか。」

それで幸子さんはとうとうたけやを掛けて行きました。

でも夜分のせいか、生憎クリームパンが賣切れになつてゐ

て、幸子さんが落膽してお家へ歸つて來たのは、もう彼は十一時前でした。

から、早く寝ないと起きられませんかよ。」

『さ、早く寝て、早く起きなくちやいけませんよ。』
『大丈夫ですつてば、母様こそ時間までにチャンとお辨當を間に合せて頂戴な、遅れたら損しちまふ。』
クリームパンを買ひ損なつた不平たらしく、一晩中怖い夢を見通した幸子さんが、翌る朝やつと眼を覺したのは、母様から散々やり起された後でした。
『アラ、遅くなつたわ屹度、遅れたかしら私、大變だわ母様、お辨當は？ お菓子には？』
『落着いて早くすれば大丈夫、先刻秋山さんと菓子さんがお迎へにいらつしたばつかりなもの。』
『アラ、まつて、下さるの。』
『だつて、あなたが起きないんだから、お先へ行つて頂きましたよ。』

『アラ、アラ、それぢや遅いわ屹度！』
半分ペソをかきさうにしながら、幸子さんは周章て、顔を洗ふなり、朝の御飯も頂かないで、母様が揃へて置いて下すつたお辨當とお菓子の包みを抱へて、ハア／＼いきを切らしながら、飛ぶやうにして

學校へ駆けつけました。

丁度その時、御連中は列を整へて、今や出立と云ふ所でしたので、幸子さんも幸福とおいてきばりにもされないですみましたが、息せき驅けて来るや否や、直ぐまた列を立つて歩かなければならぬ幸子さんは、又しても息が切れて、中野行きの電車の停車場へ行き着くまでには、へト／＼につかれてがっかりしてしまひました。

昨夜お母様に駄々をこねて、クリームパンなどを欲しがつた／＼めに、今日の楽しい遠足に、こんなに苦しい思ひをしなければならなくなつたことを、幸子さんはしみ／＼と後悔しました。

